

風姿花伝第五、奥儀云

四

寿福増長に対する戒

一、此寿福増長の嗜<sup>たしな</sup>みと申  
せばとて、一向世間の理<sup>ひたすらせけん ことわり</sup>に  
関<sup>か</sup>りて、若<sup>も</sup>し、慾<sup>よく</sup>心に住<sup>ぢう</sup>せ  
ば、これ第一道の棄<sup>すた</sup>るべき  
因縁なり。道の為<sup>ため</sup>の嗜<sup>たしな</sup>みに  
は寿福増長あるべし、寿福<sup>じゆふく</sup>  
の為<sup>ため</sup>の嗜<sup>たしな</sup>みには、道当<sup>まじふ</sup>に棄<sup>すた</sup>

〔口訳〕

しかし、かく寿福増長についての嗜  
みを持てと言つたからとて、ただ只管  
に俗世間の理法に拘はり、誉められて  
物質上の収入を増すといふやうな慾心  
に住して居たならば、それは第一に芸  
道の頽廢してしまふ原因となるもので  
ある。芸道の為に精進する所にこそ寿  
福の増長があるが、寿福を得ることば  
かりに心を用ひてゐては、その芸道は  
当然に頽廢墮落してしまふ。芸道が頽  
廢したならば、寿福といふものも自づ  
から消滅してしまふに相違ない。十分  
に正直延命にして、世上に万徳の妙花

るべし。道<sup>すた</sup>棄<sup>すた</sup>らば寿福<sup>をのづか</sup>自ら  
滅<sup>めつ</sup>すべし。正直<sup>えんめい</sup>延命<sup>えんめい</sup>にして、  
世上万徳の妙花を開<sup>ひら</sup>く因縁  
なりと嗜<sup>たしな</sup>むべし。

凡<sup>およ</sup>そ、花伝の中、年来稽古  
より始<sup>はじ</sup>めて、この条々<sup>しるす</sup>を注  
ところ、全<sup>また</sup>自力より出<sup>い</sup>づる

才<sup>さい</sup>覚<sup>かく</sup>ならず、幼少以来、亡  
父<sup>ちから</sup>の力を得て、人<sup>なり</sup>と成しよ  
り廿余年<sup>あひだ</sup>が間、目に触<sup>ふ</sup>れ、  
耳<sup>き</sup>に聞<sup>き</sup>き置しまゝ、其風<sup>ふう</sup>を  
受<sup>う</sup>けて、道<sup>た</sup>の為<sup>め</sup>、家<sup>け</sup>の為<sup>め</sup>、  
是<sup>これ</sup>を作するところ、私<sup>わたくし</sup>にあ  
らん物か。

を開く因縁であると信じて、道を嗜む  
べきである。

凡そ、風姿花伝の中、年来稽古条々  
より始めて、此の奥儀までの条々に於  
て記したところは、全く自分の力で考  
へ出した工夫才覚ではない。幼少以来、  
亡父の御蔭によつて一人前になり得て

から二十余年の間、或は眼にふれ、或  
は耳に聞き置いたまゝ、亡父の風を受  
けて、道の為家の為にこの書を作るの  
であつて、私意のものでは全然ない。

## 于時応永第九之曆暮春二日

馳筆畢

世阿

有判

〔評〕

この段に於ては、奥儀篇の結語とも見るべき重要な訓誡が与へられてゐる。「道の為の嗜には寿福増長あるべし、寿福の為の嗜には道当に廃るべし。道廃らば寿福自づから滅すべし」とは、実に偉大なる訓言である。奥儀篇は大体より見て、花を咲かすべき事と、その花によつて一座建立の寿福を獲得すべき事とを、反覆説いた一篇であるが、これに卑しい解

釈を以て臨むと、結局寿福第一主義を説いた如くに取られ易い。しかし、寿福は道の為に嗜むことによつて自ら来るものであつて、寿福のみを求めて道を疎かにすれば、結局寿福も滅してしまふことは、千古を貫く鉄則である。故に、慾心に住する事は結局道の破滅であり一座の破滅であることを強く指摘して、ともすれば陥り易い後進者の弊を堅く誡めたものである。これは必ずしも能楽に限つた事ではない。人生行路すべて皆かくの如きものであつて、我々の日常生活に対しても、誠に尊い教訓といはねばならないものである。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『世阿弥十六部集評釈 上巻』能勢朝次著